

私にとっての文学

——文学をとおして「自分」と出会う

三年一組 相沢綾華

はじめに——文学の役割

文学の役割とは何だろう。なぜ物語という形式は何千年も続いて存在してきたのだろう。答えはさまざま考えられるが、そもそも人間には物語への欲求が本来的に内在しているのではないか。

私たちは、物語的な想像力によって自分以外のものに（「者」だけでなく「物」にさえ）成りかわり、外部の世界を自己の内部に取り込んでいく。子どもの時のことを思い浮かべてみるとよい。そこではぬいぐるみがまだ生まれていない弟になったり、行ったことのない外国の友だちになったりしていた。私は弟や外国の友だちになって私自身に話しかけることができた。この虚構の仕組みによって、私たちは有限で一回性の生を超えてさまざまな生を生き、共感的に現実世界に参加していくのである。

しかし、この、外部を内部化するという物語性は私たちの世界を広げるだけでなく、逆に私たち自身を縛り上げ、身動きをとれなくしてしまうということもある。外部からの眼差し、モラル、期待、理想といった規制や呪縛、それらが私たちを苦しめ、時には生の危機へと追い込むこともある。加藤周一が「文学の仕事」を「すでに出来上がった、社会的約束事として通用しているものから、まず自らを解放すること」にみているように、この物語ベースの世界認知を壊すのも、実は文学の重要な役割ではないだろうか。

文学との出会い

私は幼児の時からさまざまな本を読んできた。おとぎ話や童話、小説、物語など、ワクワクしたり、感動して涙を流したり……。その時々の読書体験は私にとって大切な思い出はあるが、それらすべてを「文学との出会い」ということ

はできない気がする。なぜなら、文学との出会いとは、文学作品によって私自身が大きく変わるような体験でなければならぬと考えるからである。そういう意味で、私にとって文学との出会いは、中学 3 年生の時に担任の先生に勧められて読んだ吉行淳之介の小説「童謡」ということになる。

高熱が下がり入院することになった主人公の少年はどんどん痩せ続け、とうとう骸骨のようになってしまう。医師から転地療養を勧められ、少年は生まれた土地に帰り、親戚の家で療養する。すると今度はどんどん肥り始めて、そしてようやく自宅に戻ることができた。もどおりの体になった少年は久しぶりに学校へ行き、校庭の砂場で跳躍してみる。だが、跳躍は失敗に終わり、「自分の内部から欠落していったもの、そして新たに付け加わってまだはつきり形のものからぬもの」があることを少年は感じる。

この「内部から欠落したもの」「新たに付け加わってまだはつきり形のわからぬもの」とはいったい何か。その謎を解くことがこの小説を読む醍醐味であり、その鍵は少年と「病氣慣れのした青白い顔」の友人との関係性の変化にある、と私は考えている。

病氣で入院という事態は少年と友人との関係を逆転させることになった。「運動の選手をしていた。腕力も強かった」少年は「以前、その友人の上に馬乗りになり、ねじ伏せた顔を地面にこすりつけたこともあった」。少年はこのことをずっと忘れていた。少年は友人との強者／弱者という関係についても無自覚であった。少年にとって友人は「友人」でしかなかった。しかし、その友人が、少年に好意を寄せる少女に骸骨のような少年の姿を見せつけるために見舞いを勧めた悪意に気づくことで、過去の自分が友人に行った行為を思い出し、それが友人の心の中で少年への敵意として温められてきたことを初めて理解する。それは、これまで少年が捉えていた、つまり私（わたくし）化された「友人」が少年の前に他者としての存在を露わにする経験であったのである。「この身は私じゃない」というつぶやきは、少年にはまだ明確に把握できていないが、少年から大人へと変化したこと、ある種の成熟を暗示している。「童謡」は、「童謡」ならぬ大人の世界の入り口に立つ少年の「動揺」が描かれた小説だと言ってよい。

詳しく述べることは控えるが、高校受験が終わって卒業を控えた時期に、私はクラスの友人たちとの関係の微妙な変化、また友人の眼差しの変化にとまどっていた。「童謡」という小説はそのような私に、いま私が前にしているのは異なる道に進んでいく私、私たちが成熟するための、大人への入り口を前にした葛藤と痛みであることを教えてくれたように思う。

結び——私にとっての文学

作家の奥泉光は、「文学とは人間を探求するものだ」と端的に指摘している。「人間を探求する」と同時に「その探求を通じて人間というものの可能性を押し広げていくようなものと考えるべきではないか」とも発言している。また「人間」というものが謎に満ちた、気味の悪い、得体のしれないもの「あるいは「人間は我々が慣れ親しんでいるものとは違うものであるかもしれない」という可能性への」問いこそが文学の力の源ではないかとも述べている。私にとって文学もこの奥泉の見解と重なる。文学とは、人間存在を根源から捉え直すものであり、文学作品を読むという行為は、私を覆っているさまざまな規制・呪縛を剥ぎ取り、素の自分と出会う可能性に開かれているのである。

「参考文献」

吉行淳之介「動揺」(『子供の領分』)

加藤周一「文学の仕事」(『精選文学国語』)

奥泉光「文学よ、どこへ行く?」(『文学の再生へ』)